



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 憧憬としての歴史・宗教 : "Lune de Miel" 試論

著者	田口 哲也
雑誌名	同志社大学英語英文学研究
号	54-55
ページ	1-17
発行年	1991-11
権利	同志社大学人文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001680">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000001680</a>

# 憧憬としての歴史・宗教

## ——“Lune de Miel” 試論——

田 口 哲 也

### 1

T.S. エリオットは1919年に二冊目の詩集を出す。タイトルは単に *Poems* とあるだけであったので、第二詩集とか、あるいはその翌年に出された詩集、*Ara Vos Prec* の名前で呼ばれることが多い。またやはり1920年にはアメリカで *Ara Vos Prec* と配列こそ違いがほぼ同じ内容の詩集が出版されている。ただこの詩集は *Prufrock and Other Observations* の作品も含んだものなので、本論では便宜上1919年の詩集を第二詩集と呼ぶことにする。ただし、用いたテキストはフェイパー社の『全作品』である。

この詩集は“Gerontion”に代表されるように、難解な、取り扱いにくい作品ばかりでできたような作品群である。その理由はいろいろ考えられるが、ひとつはスウィーニーものに端的に現れる、複雑な時代状況と詩人との係わり合いであり、いまひとつは、前者と密接に関係するが、この詩集において思想家エリオットと詩人エリオットが不可分に結び付いている点にある。<sup>1</sup> 研究者の接近を許さない意地悪な陥穽があちこちに張り巡らされていて、そこではまったく意味不明な世界が展開され続けているように見えるが、それは実は作品に隠蔽された思想の不透明きのせいかもしれない。ただ、エリオットの各巻のために言うと、責任は詩人の側ばかりにあるとは言えない。<sup>2</sup>

この小論は第二詩集を総体として論じようとするものではないが、第二詩集を規定している異常なまでの歴史的現在、換言するならば、時間としての

現在の中に現れる歴史へのエリオットのフェティシズムを、専ら“Lune de Miel”という陰惨な詩を通して考えてみようというものである。

## 2

議論に入る前に全体の見取り図を示す必要があるが、ここではその代用としてこの短いフランス語の詩をまず引用し、試訳と簡単な解説を加えておきたい。<sup>3</sup>

Ils ont vu les Pays-Bas, ils rentrent à Terre Haute;  
 Mais une nuit d'été, les voici à Ravenne,  
 A l'aise entre deux draps, chez deux centaines de punaises;  
 La sueur aestivale, et une forte odeur de chienne.  
 Ils restent sur le dos écartant les genoux  
 De quatre jambes molles tout gonflées de morsures.  
 On relève le drap pour mieux égratigner.  
 Moins d'une lieue d'ici est Saint Apollinaire  
 En Classe, basilique connuc des amateurs  
 De chapitiaux d'acanthé que tournoic le vent.

Ils vont prendre le train de huit heurs  
 Prolonger leurs misères de Padoue à Milan  
 Où se trouve la Cène, et un restaurant pas cher.  
 Lui pense aux pourboires, e rédige son bilan.  
 Ils auront vu la Suisse et traversé la France.  
 Et Saint Apollinaire, raide et ascétique,  
 Vieille usine désaffectée de Dieu, tient encore  
 Dans ses pierres écroulantes la forme précise de Byzance.

(Now they have seen the Low-Lands, they return to High Earth;  
 But one summer night, here they are in Ravenna,

In their comfort between the sheets, with two hundred bugs;  
 The summer sweat, and a strong odour of a bitch.  
 They lie on their back, letting loose the knees  
 Of four soft legs terribly bitten and swollen.  
 One raises the sheet so that one can scratch better.  
 Within less than a mile from here lies Saint Appolinaire  
 In Classe, the basilica known to the lovers  
 Of capitals of acanthus that the wind turns.)

(They are going to take the eight o'clock train  
 To prolong their misery from Padua to Milan  
 Where one finds the Last Supper, and a restaurant not  
 expensive.  
 He thinks of tips, and draws up his balance-sheet.  
 They will have seen Switzerland and traversed France.  
 And Saint Appolinaire, steep and ascetic  
 The old factory, deconsecrated, of God, still keeps  
 Within its crumbling columns the precise form of Byzantium.)

1行目をどう読むかだが、Pays-Bas と Terre Haute は言葉の上でもまたその指示内容においても対比させられていると考える他はない。S.S. Hoskot などは、この詩ではアメリカの中西部からの旅行者がビザンチン様式の教会と対比させられていて、アメリカ人旅行者はその教会をまったく意識することができず、また何ら関係を持つことがないと言う。<sup>4</sup>それはちょうどベニスのサンマルコのキューポラを見て蕪が逆さまになっているようだ<sup>5</sup>と笑いとばすアメリカ人観光客のバンダリズムへの風刺であるかのようなのである。<sup>5</sup>しかしこの作品はこのような表層的な解釈で終わってしまうような単なる風刺詩ではない。

Eloise Knapp Hay は Pays-Bas を Low Countries と読み Terre Haute

をイタリアと考えている。<sup>6</sup>例えばベネルクス三国を低地地方として、アルプスを越えてイタリアに入ったという経路を考えるのは自然であるが、ある意味では馬鹿馬鹿しくなるこのような議論が起こるのは、この作品の冒頭の1行が実は具体的な地理関係を暗示しつつも同時に精神的な高低をナレーションの基調としていきなり持ち出しているからである。

2行目の“les voici à Ravenne”という詩句が早くも明らかにするようにこの詩は今ラベンナにいる語り手がこの地を訪れた一組の新婚の男女の滑稽で無残な蜜月を歌うという設定になっている。しかしこの新婚の男は、ちょうど同じく第二詩集に収められている別のフランス語による詩、“Dans le Restaurant”におけるウェイターと同様、「わたし」のドッペルゲンガーであることは間違いがない。そうすると、2行目から10行目までで語られる夏の1コマの回想はラベンナで起こった「事件」であり、11行目から15行目までは二人を見送った語り手の千里眼的想像（ドッペルゲンガーである限りは、実は事実でもある）であり、最後の3行はラベンナの聖アポリネール寺院のアップの静止画となる。

ほとんど全ての翻訳者や批評家は見落しているが、イタリアの地理を確認すれば明らかのように、この Pays-Bas とはアドリア海に注ぎ込むロンコ川とモンテネ川に挟まれた低湿地であるラベンナのことであり、Terre Haute とはラベンナから見たときのラベンナの外側に位置する世界である。<sup>7</sup>そして重要なことは、作品が明らかにするように、この地理的な高低の関係が、こと精神的な世界においては全く逆転するという皮肉な設定が早くもこの冒頭で用意されているという点である。

### 3

“Lune de Miel”はわずかな例外を除いてほとんど論じられることがなかった。だが、このような無視された状態はある意味ではもっともな結果であるとも言える。他のフランス語で書かれた作品と同様に、そこに認められる

のは徹底したシニシズムである。例えば“une forte odeur de chienne”という肉体への嫌悪を直截に示した詩行にぶちあたった時の読者の側の困惑は、この詩人の重層性を証明することには役立っても、その重層性そのものの発生源からは絶えず切り離されていく、ある種の拒絶感しか生み出さない。誤解されがちであるが、この「メス犬の強い匂い」という不吉なフレーズは詩人の女性の肉体への嫌悪のみを示すものではない。自己と他者の相互浸透を繰り返す初期のエリオットのブラッドレー的観念の世界では自己は常に他者によって規定され、また他者は逆に自己によって規定されてゆく。自己の肉体もまた獣であり、ひいては全人類の性の営みは現代においては獣の交尾と同義である。ただそれは精神性を喪失した人類の性の姿である以上、実際には獣の交尾以下にならざるを得ない。

私たちにとって身体とは何かという問いを発する以前に肉体そのものを拒絶されてしまえば、詩者が切り込んでゆく余地はまったく残されない。人間が肉体を拒絶した時——それはまず他者の肉体の拒絶に始まり、次に自己の肉体の拒絶に行き着く——、残されるのは精神のみであるというのが二元論的な議論の描く図式であるが、エリオットの激しい詩的表現はこのような単純な図式を破壊する極めてアナキーなものである。たとえそこに何の意味を見いだすことができなくとも回避できない性をエリオットは「メス犬の匂い」というフレーズでとらえてみせた。しかしこのように自らが置かれた状況をこのうえなく詩的に切り取ってみせることによって、彼自身もまた自己を出口のないトンネルに置いてしまったことにもなる。ここからの脱出口を彼が如何に見い出そうとしたか、あるいは彼が用意した脱出口がはたして機能しうるのかどうかという議論は本論の射程範囲ではない。ここでは彼の迷い込んだ出口のない暗闇を踏破してみる他はない。

4

“Lune de Miel” は “Le Directeur”, “Mélange Adultère de Tout”,

“The Hippopotamus” と共に *Little Review*, VI, 3 (July 1917) に発表された。“Lune de Miel”はそのタイトルから明らかなように新婚旅行を歌ったものであり、その舞台は北イタリアということになっている。伝記的な背景を若干紹介しておく、エリオットの結婚は1915年のことで、ハネムーンは北イタリアではなく、イングランド南東部のサセックス州の保養地、Eastbourne であった。<sup>8</sup> またエリオットの短期間のイタリア旅行は1914年だから、この作品は14年のイタリア旅行と15年の Eastbourne の新婚旅行のそれぞれの回想を合成して作り上げたものと推測することができる。

エリオットの研究者にとってはごく常識的な伝記的事実をここで復習したのは、パーソナルな一面をこの作品から読み取ろうとか、あるいはその逆にパーソナルな事実をこの作品の中に読み込もうと願っているからではない。このどちらをも格段否定しようという気はないが、“Lune de Miel”は *The Waste Land* と違ってパーソナルな視点を敢えて導入しなければ新しい読みを展開できないといった、研究者の議論が集中する大作でもないし、かといってエリオット伝の挿し絵として大部の書物の1頁を飾るだけではすまされない問題を抱えた作品である。蜜月の舞台を北イタリアへとシフトさせた点と、ハーバード時代の、初期詩篇の草稿をノートブックに記していた頃と違って、詩人が実際に肉体を持った他者との相克を経験し始めた後の詩作であることをまず確認しておきたいからである。

重要なのは性的な体験をしたかどうかにあるのではない。性はそれを意識し始めた段階ですでにその人の意識に変化をもたらすものであり、経験の有無は極論するなら意識の様態にはなんの影響も与えない。自己と他者の肉体による交渉が互いに嫌悪や喜悅など種種諸々の感情を喚起する時、人が経験するのは性そのものではなく、実は肉体と精神の葛藤なのであって、ちぐはぐな自己対自己、あるいは自己対他者の永遠に噛み合わない対話を通して人は身体に初めて突き当たることになる。一個の身体を前にしては、どのように見事に構築された形而上学も効力を発揮しえない。*Prufrock* と第二詩集の決

定的な差異は、前者における観念の自己増殖が後者において消え去り、スウィーニーものに代表されるカリカチュア、即ち観念や精神といった内面的な要素が事物や人物をとおして外化されてゆくところにあると言えよう。このような外化はフォルムによって最もよく表現されるとしたら、建築がその最良のモデルを詩人に示したであろうことは十分に推測されうる。そしてさらにその建築に歴史が刻み込まれているなら舞台はこの上ないものとなる。蜜月の舞台を詩人がイタリアに移したのは、このように考えてみるなら当然の結果であったと言える。

建築への憧憬を詩作に投射するなら、それは定型詩に行き着くことになる。第二詩集はエリオットの詩人としての経歴において最も定型詩に近付いた時期の詩作を集めたものであるが、“Lune de Miel”はマラルメ以降の時代にありながら、基本的にはアレクサンドル句格で書かれた詩である。<sup>9</sup>これは1行12シラブルからなる、一六世紀以来のフランス詩における標準的な韻律であり、特に dramatic、ないしは narrative なフォルムとして用いられる。ラシーヌを中心とする一七世紀の劇作家によってこの詩型は完成されてゆくが、6番目のシラブルの後に caesura を置くのが標準である。<sup>10</sup>スペースの関係で細かな検証は行わないが、テキストを見れば分かるように以上の辞書的な定義を“Lune de Miel”はほぼ満足している。同じ第二詩集に含まれている“Gerontion”で重く響くジャコビアン朝の詩劇の韻律と同じく、古風ではあるが劇的であり、かつ自己の語りを保証するフォルムを詩人が選び取ったのは決して偶然ではない。

## 5

この作品の誕生の背後にあるエリオットの根本的な欠陥と作品そのものの意味についてはすでに寺田建比古氏による、やや断定的ではあるが普遍的な解説があるので、ここではそれを利用させてもらうことにする。



エリオットにおいては、至る処愛についての深刻な意識はある。しかし、それにもかかわらず、作品には愛の名に値する人間的愛の直接的な表現は、ついに一度も現われ出ては来ない。自然もまた、愛の出会いのクリームにある者、出会いのただ中にある者、かつてその悦びを知りえた者のみのもつ魂のレンズを通して、ただの一度も体験せられてはいない。自然は直截に沙漠であり、そこにおける住人たちは、直截に目差しと性器を具えた腐解しゆく骸骨の群である。エリオットが最も知らないものは、愛においてある女性の魂と肉のやさしきであり、美しきである。一般に、性を担うものとしての女性は、常に、彼にとってシニカルな憎しみの対象であるかにさえも見える。<sup>11</sup>

次はこの作品の意味について。

この詩作の意味は、いかにもエリオットにふさわしく三重の層へと投げ込まれている。まず、第一の意味の層においては、現代人の新婚生活一般が、秘められた本質的な層において、かくの如き意味なきもの、生きながらの死そのものに他ならぬという痛烈な反語的断罪（諷刺）であり、第二の層においては、自己自身のかくの如き新婚生活に対する激しいシニシズム（自嘲）である。ここにもまた、エリオット独自の、外に向かう反語と内に向かう反語との微妙な重ね合わせがある。けだし、シニシズムとは死に至るまで癒やされることの出来ないエリオットの病である。作品を一貫して、およそ性的なもの、女性的なものの臭いに対する激しい本能的な嫌悪感が漲っている。「牝犬の臭い」とは、推定の根拠は今しばらく保留することとして、死・復活を阻むものとしての女体の臭いである。しかし、青年エリオットは、本源的な性愛への途を拒まれていた者としての自己自身に対して、ここでもまた、早くも可能的な救済の布石を打つことを忘れてはいない。すなわち、第三の意味の層において、

詩人は自己自身を不敵にもダンテに擬しているのである。地上の現実生活においては、牝犬の臭いを発しつつ、二百匹の南京虫に咬まれた二本の腿を開いては、憶面もなくひっかく妻と夜毎寝台を共にしながら、しかも魂は絶えずベアトリーチェのもとにあって宗教的に熟成していったダンテに擬しているのである。サティリカル＝シニカルな諧謔を以て描き出される蜜月旅行の惨めさ、醜悪さ、無意味さと鋭い対照をなして、わずか一里足らずの処に聖アポリネール寺院が——世人の眼にはその本来の宗教的な意味が失われてしまっているにもかかわらず、詩人の心眼には今もなお——峻厳、禁欲、秩序、形式美の象徴として間近に聳え立っていることを思え。<sup>12</sup>

寺田氏の厳密な意味においての文芸学的な陳述を、誤解を覚悟の上で敢えて一語で要約するなら、エリオットは歴史へのフェティシズムをもってして自己の性愛の不能を解消しようとしたと言える。このような詩人の意図を読み取れたかが解釈上の大きな別れめになるのではなからうか。

## 6

“Lune de Miel” を肯定的に見る研究者が圧倒的に多い中で、ほとんどただ一人否定的な見解を示した Moody の所論を検討する前に、肯定論者たちの意見を簡単に紹介しておくことにしよう。まず、根拠を示さずに肯定している者に、Pinion と Hay がいる。Pinion は “one could wish he had made more of it in English poetry” と最大限の賛辞を送りながら、その評価の根拠としては過去の栄光と現在の腐敗の “ironical juxtapositions” をあげているのみである。ただ、ここで彼が言う “juxtapositions” とは実のところはコントラストのことであると思われる。<sup>13</sup> Hay は Pinion よりややましで、“Lune de Miel” はたったひとつの否定辞も用いずに新婚旅行をトレースしながら、なおかつ恋するものたちのバカンスの完璧な空虚さを描

き出していると主張している。これは後に紹介する Hugh Kenner の見方に、文体に注目しているという点においてやや近いが、問題は Hay の論点の前提として、この新婚夫婦は互いに特に憎み合っていない、少なくとも、男は女に対してさほど嫌悪感を持っていないということが必要になる点である。Hay は “degraded and degrading view of sexual failure” にちゃんと言及して、嫌悪の視点に気付いているのだから、問題の “une forte odeur de une chienne” の解釈がまったくなされていないことになる。<sup>14</sup>

この二人に比べれば、まだ少しは納得のいく根拠を示しているのが、Smith と Kenner であり、評価が玉虫色ではあるが、さらに Scofield を加えることもできよう。Smith は “Le Directeur” の醜悪さと華麗さのコントラスト、“Cousin Nancy” や “Mr. Apollinax” の輝かしい存在と文化的無気力のコントラストを論じたあと、“Lune de Miel” で初めてこのようなコントラストが単なるアイロニックなコメントにとどまらずに、ひとつのシーンそのものに統合されていると言う。そして Smith はハネムーンのカップルの肉欲と聖アポリネールの精神的価値、ミラノの安食堂とダビンチの「最後の晩餐」といったコントラストを例としてあげて積極的に支持しているのだが、これは後の Moody が否定しているコントラストとそのままほとんど重なっているのは興味深い。<sup>15</sup>

Kenner の解釈は “Lunc de Miel” を支持し、評価する者の中にあって最も重要と思われるので少し詳しく彼の主張を追ってみることにする。彼は一貫してこの作品の乾いた文体 (“the deliberate desiccation of language”) に注目している。彼のあげている特徴は、(1) the arid detachment (2) the scientific dryness of the French declarative sentence (3) impersonal な on (中性人称代名詞) の多用、であるが、これらの文体上の特色が Saint Apollinaire en Classe の、無言でその歴史性を示すあり方に一致していると言う。この詩はエリオットの重要な作品のひとつとは言えないにしても、理にかなった方法を発見した最初の作品あると指摘が続く。そしてこの方法が

Jean de Bosschère から来たものであることを付け加えることを忘れてはいない。日常的情緒から芸術的情緒へというエリオットの路線が1917年のBosschère 論を経て、二年後の“Tradition and the Individual Talent”へと繋がってゆき、やがてそれは *The Waste Land* で全面開花すると結論付けられている。<sup>16</sup>

Smith と Kenner の論点を押さえながらもこの二人とは正反対の評価を下しているのが Moody である。戯画化された現在と理想化された過去のコントラストは真の historical sense からの逸脱であり、Joyce や Pound とは別の道をゆくこの詩に現れているコントラスト、それは Smith の挙げている具体例と重なり合うのだが、それを Moody は“a series of easy and superficial contrast”だと強く否定している。そしてこのような“crude simplification”なしに本来の historical sense が生きている例として *The Waste Land* の257行目から265行目(“O City city, Magnus Martyr hold inexplicable splendour of Ionian white and gold”の出てくる箇所)が挙げられている。失われた価値の invocation は arbitrary であり、人間や文化に対するスウィフト的な見方は petty で not powerful であるとも言い、とどめをさしている。<sup>17</sup>

Moody はややむきになっているように見えるが、それは彼がエリオットの批評から正確に読み取った歴史的感覚を作品の読解の際のキャンノンにしているからである。視点を変えるためにだけ過去を持ち出してきて、安直に現在と対比させる方法を彼は評価しない。過去が現在に生き、逆に現在が過去に生きるというような、深く過去と現在が結び合う表現にならないものを敢しく切り捨てる彼の批評的態度はエリオットの良質な批評のエッセンスに最も忠実であると言えよう。ただ、エリオットが身体の否定から歴史・宗教へのフェティシズムへと走る悲劇については、さらに考えてみる必要があるように思える。

## 7

“Lune de Miel”は完結した詩の世界を私たちに見せる。勿論エリオットという詩人の達成したより大きな詩の世界のなかにこの作品を投げ込むこともできるし、あるいはまたモダニズムという巨大な文脈の中においてみることもできないことはない。しかしそれは恐らくこの作品に対する否定的な評価を生み出すことにしかならないのは Moody の所説がすでに明らかにしている。この詩は第二詩集の中でしかその意味を見いだせない性質の作品なのかもしれない。ヨーロッパに初めて直に接したこの詩人がいかにその「歴史の現存」に圧倒されたかは、多分ヨーロッパの知識人には理解できないであろう。それはたとえばあるビートニックの芸術家がアメリカに日本の寺院を持って帰りたいと言っても、私たちに彼／彼女を笑う権利がないのによく似ている。

この歴史に対する飢餓感は歴史を現在という時間の中に留めている建築への憧憬となり、ひいては時間と無時間をフォルムで繋ぐ建築を生み出した観念、即ち宗教への憧憬となる。愛の不能という自らの欠損を埋めて余りあるこの倒錯を脳面もなく表現してみせた“Lune de Miel”の若き詩人のニヒリズムに、ばらばらに砕け散った過去の価値体系の中からそれでも這い出してきて新しい価値体系の構築を夢見た様々な個のそれぞれのニヒリズムを重ね合わせてみることもできる。

もしもエリオットが身体を欠如させたままで歴史や宗教への憧憬を増幅させてゆくのではなく、身体そのものに向かい続けることによって歴史や宗教へたどり着こうとしたならば、という問いは禁じ手であるが、何が後者の道を詩人に選ばせなかったかという問いかけは無駄ではない。この問いの解答は、多分、第二詩集を根本的に読み直す作業を通してしか得られないはずである。本稿で成し得たことは当初の目的に遠く及ばず、結局は“Lune de Miel”をどう読むか、この作品の意味をどう位置付けるか、そしてまたこ

の作品をめぐる議論の蒸し返しと、読解のための基礎的な作業で終わってしまったが、他日また、本稿を補いつつ、第二詩集が抱えている根本的な問題をさらに考えていきたいと願っている。

## 注

- 1 西脇順三郎はエリオットのフランス語の詩を高く評価して、一括して、「生気がなくやはり英語の方がよい」と酷評している。“Lune de Miel”を文学表現として認めていないのは如何にも西脇らしくて興味深い。西脇順三郎、『T. S. エリオット』（東京：研究社、1956年）、115頁。
- 2 従来のエリオット研究には詩人と詩人が生きた複雑な時代状況を解き明かそうという視点が欠如していた。例外的な業績としては、第二詩集を直接扱ったものではないが、中井辰氏の次の諸論文があげられる。『『荒地』の人々の行方——T. S. エリオットと一九二〇年代——』、同志社大学人文科学研究所『人文科学』第一〇号、(1979年)、123-154、「シティのステットソン氏——“Stetson...Is that his name? —— (その1)」、『同志社大学英語英文学研究』37 (1985年)、1-57、「シティのステットソン氏——“Stetson...Is that his name?” —— (その2)」、『同志社大学英語英文学研究』42 (1987)、19-83。
- 3 使用したテキストは *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* (London: Faber and Faber, 1969)。なお、*Collected Poems 1909-1962* では1行目の Pays-Bas が Pay-Bas に、5行目の écartant が écartent になっていた。この作品の邦訳は何種類もあるが、ここではフランス語で書かれた原詩との対照が便利のように、直訳に近い英訳を試みた。
- 4 S. S. Hoscot, *T. S. Eliot: His Mind and Personality* (Bombay: University of Bombay, 1961), p. 48. 『筑摩世界文学大系57』所収の深瀬基寛訳では Terre Haute は原音で「テル・オート」と訳され、「Terre Haute はアメリカ、インディアナ州の小都市 Terre Haute のことか、または Highlands のフランス語訳か、いずれにせよ Pays-Bas (低い国) と対比してのしゃれならん。」という注が付いている。実際に Terre Haute という町はあるが（もっともアメリカにはほとんどすべての地名があるのだが）、Hoscot もまたこの地名に引きずられて、中西部からきた観光客という解釈をしたのかもしれない。エリオットが仕掛けた畏の一つとして例をあげたが、作品構造を無視した source hunting がもたらす珍解釈は枚挙に遑がない。
- 5 D. H. Lawrence は彼の *Studies in Classic American Literature* の中の Fenimore Cooper の項で次のようにのべている、“I have often thought, hearing American tourists in Europe—in the Bargello in Florence, for example, or in the Piazza

di San Marco in Venice—exclaiming, ‘Isn’t that just too cunning!’ or else, ‘Aren’t you perfectly crazy about Sant Mark’s! Don’t you think those cupolas are like the loveliest *turnips* upside down, you know’—as if the beautiful things of Europe were just having their guts pulled out by these American admirers. They admire so wholesale. Sometimes they even seem to grovel. But the golden cupolas of St Mark’s in Venice are turnips upside down in a stale stew, after enough American tourists have looked at them.” *Studies in Classic American Literature* (Harmondsworth: Penguin Books, 1971), pp. 44–45. ラフォオルグやコルビエールの影響を受けた初期のエリオットは風刺詩を書いたという文学史的な解説を鵜呑みにするのもよいが、そしてまたエリオットのもともとのナショナリティを思うなら、滑稽なアメリカ人のヨーロッパ観光というテーマは捨てるのが難しいが、この詩の本来のテーマはここにはない。処女詩集の国籍不明と違って、第二詩集ではヨーロッパが全面に出てきて、まるで *The Waste Land* を予告するかのようである。上でロレンスのやや意地悪い文章をわざわざ引用したのは、ロレンスが見たアメリカ人観光客の文化破壊と極端に対照的なエリオットのヨーロッパへののめり込みに実は同根の宿病を見るからである。本論のテーマであるエリオットの歴史へのフェティシズムはサンマルコに燕の倒立をみるアメリカの後進性と無関係であるとは思えない。エリオットは“Lune de Miel”を言っていた当時を振り返って次のように語っている。“I had at the time the idea of giving up English and trying to settle down and scrape along in Paris and gradually write French.” Geroge Pimpton ed., *Writers at Work: The Paris Review Interviews, Second Series* (Harmondsworth Penguin, 1977), p. 99.

6 Eloise Knapp Hay, *T.S. Eliot’s Negative Way* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1982), p. 40.

7 1行目の主な邦訳を以下に示してみる。「彼らは低き国オランダを尋ねたが、高き地の国にもどる」(『平凡社世界名詩集大成』上田 保訳)、「オランダ見物をして、ふたりはテル・オートに帰ってくる」(『筑摩世界文学大系』深瀬基寛訳)、「二人は低き国オランダを見て、高き地の国へと帰ってくる」(『T.S. エリオット——沙漠の中心』寺田建比古訳)。訳者は一様に Pays-Bas をオランダと見ている。確かにフランス語ではそうなのだが、オランダと限定してしまうと、Terre Haute が完全に浮いてしまう。英米のエリオット研究者たちも似たような解釈をするか、この問題に触れないかのどちらかである。しかし1行目を、エリオットがよくやるように、ちょうどエピグラフのように読み、全体をあらかじめ規定していると考えなければ、全くこの詩とは無関係のオランダがどうしても出て来てしまう。

8 Martin Scofield, *T.S. Eliot: The Poems* (Cambridge: Cambridge University

- Press, 1988), p.99.
- 9 Grover Smith は “free alexandrines” と呼び、Hugh Kenner は “modified Alexandrines” と呼んでいる。Grover Smith, *T.S. Eliot's Poetry and Plays: A Study in Sources and Meanings* (Chicago: The University of Chicago Press, 1950; second edition, 1974), p.35. Hugh Kenner, *The Invisible Poet: T.S. Eliot* (London: Methuen, 1959), p.69.
- 10 Alex Preminger ed., *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1965; enlarged edition, 1974), p. 11.
- 11 寺田建比古『T. S. エリオット——沙漠の中心』(東京: 研究社, 昭和38年), 145頁。この書物は久しく絶版であるので敢えて引用を試みた。出版後30年近くたったいまでも本質的な研究書としての価値を失っていない。
- 12 寺田建比古, 146-147頁。
- 13 F.B. Pinion, *A T.S. Eliot Companion: Life and Works* (London: Macmillan, 1986), pp.83-84.
- 14 Hay, p.2, pp.40-41, p.81.
- 15 Smith, pp.35-36.
- 16 Kenner, pp. 69-72. エリオットの Bosschère 論とは *Egoist*, IV (October 1917), 133の F. S. Flint の訳書, *The Closed Door* の書評を指す。なお、蛇足であるが、Scofield の見解は “precise form” に注目している点で Kenner に近い。Scofield は “precise form” は第二詩集で特に賞賛される価値であるが、この詩集全体において提示される文明のように、石は崩れてもフォルムはなお守られると述べている。Scofield, p. 99.
- 17 A.D. Moody, *Thomas Stearns Eliot Poet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), pp.57-58.

1991. 4. 30 受理



**Synopsis**

## Aspiring after History and Religion: An Essay on “Lune de Miel”

Tetsuya Taguchi

Along with “Gerontion,” “Burbank with a Baedeker: Bleistein with a Cigar,” “Whispers of Immortality,” “Sweeney Among the Nightingales” and some other poems, four French poems are included in T. S. Eliot’s *Poems 1920*. “Lune de Miel” is one of them. This poem is ambiguous and hard to understand on the first reading, as other poems are.

In spite of its difficulty, *Poems 1920* is provocative, stimulating and even controversial, such that critics have continued lively discussion of it in essays and books. In many cases, however, the focus of these discussions have been on Eliot’s “philosophy” or on his more famous works, such as *The Waste Land*. Criticism dedicated to this poetry collection is rare. On the other hand, some poems have become well known through various anthologies. It cannot be denied that the works contained in *Poems 1920* are both popular and mysterious.

In this essay, I have tried to elucidate and interpret “Lune de Miel” with a view towards encouraging a better understanding of *Poems 1920* as a whole. Trying to find out the poet’s original intention, I have come upon the the phrase, “et une forte odeur de

chienne.” This is more than a particular expression of the poet’s misogyny. While it expresses the rejection of human body and its weakness, it forms the central view point of this poem. As it has been pointed out, in this ironical verse there is certainly a contrast of the Christian glory in the past and the degraded present that lacks faith: the precise form of a Byzantine basilica and the miserable honeymoon of the modern couple. But this contrast can be shown to us only through this view point. Eliot’s love of history and religion or a compound of them, which often finds its form in Christian church buildings, is here thus most extreme. It is almost like fetishism. And on this somewhat perverted view “Lune de Miel” swings.